

出雲郡家関連遺跡群第9次発掘調査概報



2001年3月

島根県斐川町教育委員会

序 文

斐川町教育委員会では、平成12年度の国庫補助事業として出雲郡家閔述遺跡群の第9次発掘調査を実施いたしました。

出雲郡家閔述遺跡の発掘調査を行なう契機となりましたのは、平成3年度の県道拡幅工事に伴う後谷遺跡の調査によって、大きな礎石とともに大量の炭化米が発見されたことあります。これは『出雲國風土記』に記載された出雲郡家に付随する正倉跡ではないかと注目されました。

平成4年度から7年度の4カ年にわたり、国庫補助事業による正倉跡の確認調査を実施いたしました。平成8年度以降は出雲郡家の中心的施設を確認するために発掘調査を行なっておりますが、現在のところ明確に中心施設と断定できるものは確認されておりません。しかし、今後の調査によって全容が明らかになるものと期待しております。また、この「先人の足跡」を確認する発掘調査とこれによって得られる埋蔵文化財を皆様にご理解いただき、私たちのまち斐川町の過去の姿に思いをはせていただければ、幸いと存じます。

末筆ではございますが、この調査にご指導・ご理解・ご協力を頂きました地権者の青木菊雄氏をはじめ近隣住民の皆様並びに関係諸機関の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも文化財行政になお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2001年3月

斐川町教育委員会
教育長 村上家次

例　　言

1. 本書は斐川町教育委員会が平成12年度に国庫補助事業として実施した出雲郡家閔連遺跡群第9次発掘調査概報である。
2. 本年度調査した遺跡は、後谷Ⅳ遺跡で調査区は14区である。所在地は斐川町大字出西2082番地である。
3. 調査組織は下記のとおり。

事務局 陰山 畏（斐川町教育委員会文化課課長）・勝部節子（同係長）・竹下真由美（同職員）

調査員 松本堅吾（斐川町教育委員会文化課主事）・原 賢二（同）・伊藤歩美（斐川町教育委員会文化課嘱託）

遺物整理 高木和子・錦田充子

4. 調査は平成12年11月13日より着手し、平成13年2月28日に終了した。
5. 調査の実施にあたっては、陰山真樹・江角 健（以上 斐川町教育委員会文化課）・樋野喜久・樋野康江・樋野 忠・長谷川房夫・陰山律雄・陰山百合子・勝代 勇・高橋重雄・多々納孝夫・青山 保・青木道夫・小豆沢敏子・矢野政子・大田晴美諸氏らの協力を得た。

また、山中敏史氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室室長）・木本雅康氏（長崎外国语短期大学助教授）・池田敏雄氏（斐川町文化財保護審議会委員）からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

6. 本書の編集は原が、執筆は原、伊藤が行ない、執筆分担は日次に記した。遺物実測は錦山が、図版トレースは高木・錦田がそれぞれ行なった。写真撮影は伊藤が行なった。

凡 例

1. 図中の方位は基本的に座標北をあらわしている。
2. 本文および図版中の示したレベル高は、すべてT.P.+値(m)であるがT.P.+は省略している。
3. 遺物番号は実測図版と写真図版で統一している。
4. 遺構の名称は、下記のとおりアルファベットの組み合わせによって表している。また、遺構番号は2桁を原則として1桁の数字には前に0を付している。

P i t	柱穴	S D	溝状遺構	S X	性格不明遺構
-------	----	-----	------	-----	--------
5. 本書で使用した土壤色は、小山正忠・竹原秀夫編著『新版標準上色帖』1988を用いて命名しているが、本文中は色相・明度・彩度の数値を省略している。
6. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、弥生土器・上師器—白抜き、須恵器—黒塗り、土師質土器—トーンのように塗り分けた(弥生土器・土師器が同じ表示であることに、人意はない)。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

I. 調査に至る経緯.....	(原)	1
II. 位置と環境.....	(伊藤)	3
III. 層位.....	(原)	6
IV. 遺構.....	(原)	7
V. 出土遺物.....	(伊藤)	8
VI. まとめ.....	(原)	12
報告書抄録.....	卷末	

挿図目次

第1図 後谷IV遺跡(14区)周辺の遺跡 2

図版目次

- 図版. 1 後谷IV遺跡(14区)調査区位置図
- 図版. 2 後谷IV遺跡(14区)調査区平面図
- 図版. 3 後谷IV遺跡(14区)調査区断面図
- 図版. 4 後谷IV遺跡(14区)遺構断面図
- 図版. 5 後谷IV遺跡(14区)出土の遺物
- 図版. 6 後谷IV遺跡(14区)調査前現況
- 図版. 7 後谷IV遺跡(14区)調査区全景
- 図版. 8 後谷IV遺跡(14区)調査区断面
- 図版. 9 後谷IV遺跡(14区)遺物出土状況
- 図版. 10 後谷IV遺跡(14区)出土の遺物①
- 図版. 11 後谷IV遺跡(14区)出土の遺物②

I. 調査に至る経緯

平成3年度の県道木次直江停車場線緊急地方道路整備事業に伴う試掘調査によって発見された後谷V遺跡は、総柱の礎石建物（2間以上×3間）1棟や大量の炭化米が検出されたことにより、発見当時『出雲国風土記』記載の出雲郡家の正倉ではないかと注目された。

平成4～7年度にかけて、国庫補助事業による範囲確認調査を実施した結果総柱の掘立柱建物2棟、総柱の礎石建物2棟、側柱の礎石建物1棟や、柵列1条、溝状遺構などが検出された。これらの遺構は、いずれも出土遺物から判断して、奈良～平安時代初め頃に存在していたものと考えられる。調査の成果を整理すると、検出された建物群は、直列な配置という規格性があり、個々の建物が大型であることや炭化米が伴うことによって、一般集落の倉とはちがい、官衙などの公の倉庫にみられる特徴を持つ。また、検出された溝状遺構が正倉範囲の区画溝とすれば、南北120m、東西150mを推測できる。^①

平成8年度以降は郡家施設の中心的施設の郡庁の確認を目的として発掘調査を実施してきたが、後谷（V）遺跡周辺の小野遺跡や稻城遺跡も含め、館や厨家などの付属的な施設と想定される遺構は確認されているものの、未だに郡庁といえる遺構は確認されていない。しかし、円面硯や風字硯、墨書土器などの官衙的要素の強い遺物が出上しているため、何らかの政務を司る建物が存在するものと思われる。

平成12年度の調査についても郡庁の確認を目的とした。今回の調査区設定については、平成12年2月15日に開かれた出雲郡家関連遺跡群発掘調査に伴う調査指導会で想定された4ヶ所の内の一つである。



- | | | | |
|---------------|---------------|----------------|---------------------|
| 1. 後谷(V)遺跡 | 2. 神守 I 遺跡 | 3. 神守 II 遺跡 | 4. 神水古墳群 |
| 5. 有間谷遺跡 | 6. 氷室 II 遺跡 | 7. 和西 I 遺跡 | 8. 和西 II 遺跡 |
| 9. 氷室 I 遺跡 | 10. 氷室 IV 遺跡 | 11. 城山東古墳群 | 12. 城山城跡 |
| 13. 城山古墳群 | 14. 氷室 III 遺跡 | 15. 小野遺跡 | 16. 外ヶ市遺跡 |
| 17. 後谷 I 遺跡 | 18. 稲城遺跡 | 19. 新在古墳 | 20. 外ヶ市古墳 |
| 21. 押屋古墳群 | 22. 長者原古墳群 | 23. 郡家(長者原)推定地 | 24. 後谷古墳 |
| 25. 稲城丘陵古墳群 | 26. 後谷東古墳群 | 27. 後谷 III 遺跡 | 28. 後谷 IV 遺跡 |
| 29. 出西小丸古墳群 | 30. 後谷横穴群 | 31. 後谷丘陵古墳群 | 32. 八幡宮横横穴 |
| 33. 後谷町道脇古墳 | 34. 後谷 II 遺跡 | 35. 沢田横穴群 | 36. 沢田 I 遺跡 |
| 37. 山ノ奥横穴群 | 38. 山ノ奥 I 遺跡 | 39. 中出西 I 遺跡 | 40. 劍先横穴群 |
| 41. 中出西 II 遺跡 | 42. 上出西 II 遺跡 | 43. 出西岩槻跡 | 44. 海の平横穴群 |
| 45. 海の平遺跡 | 46. 岩槻上横穴 | 47. 上出西 I 遺跡 | |

第1図 後谷IV遺跡（14区）周辺の遺跡

II. 位置と環境

斐川町は、島根県東部の宍道湖西岸に位置し、斐伊川の下流域に形成された肥沃な沖積地である北部の簸川平野と、仏経山（神名火山）や大黒山といった標高300m級の山々が連なる南部の丘陵地帯から成る。

本町内では、これまでに223ヵ所の遺跡が知られているが、北部の沖積地ではほとんど確認されておらず、その大半が南部の丘陵地帯あるいは低丘陵に囲まれた谷部に集中している。以下、町内の遺跡について時代を追って概観していく。

旧石器時代の遺物は今のところ確認されていないが、丘陵の谷間に立地する結遺跡、武部遺跡、新田畠Ⅰ遺跡、上ヶ谷遺跡、後谷（V）遺跡からは縄文土器が出土している。

仏経山の北東にある小さな谷の最深部に位置する神庭荒神谷遺跡は、弥生時代の代表的な遺跡である。標高約28mの丘陵の斜面中腹から銅劍358本、銅鐸6個、銅矛16本が出土した。

弥生時代は出雲平野や宍道湖周辺で遺跡が増加する時代で、斐伊川西岸の出雲市では、天神遺跡や古志本郷遺跡など環濠と思われる大溝を持つ大規模集落が出現してくる。一方、本町内では弥生時代の遺跡は少ない。しかし、中期末から古墳時代初め頃の上器が出土した宮谷遺跡や斐伊川鉄橋遺跡のような集落関連の遺跡があるほか、弥生時代の堅穴住居跡が確認されていた杉沢遺跡に隣接する三井Ⅱ遺跡からは、今年度の調査で新たに中期以降の堅穴住居跡を3棟検出し、神庭荒神谷遺跡との関連で注目される大規模集落が町内に存在する可能性が出てきた。

また、後期後半には出雲市の西谷墳墓群では四隅突出型墳丘墓が造られるが町内ではこの時代の墳墓は確認されていない。

古墳時代前期の古墳は未発見であるが、中期には神庭岩船山古墳（前方後円墳・推定全長57m）や軍原古墳（前方後円墳・現存長30m）、小丸子山古墳（円墳・直径35m）といった大型古墳が丘陵上または縁辺部に造られる。しかし中期後半から後期にかけて、丘陵尾根上に結古墳群や城山古墳群のよ

うな小規模な古墳が築かれるようになり、古墳の数は増加するものの、大規模なものは認められなくなる。そして後期以降は、山麓や丘陵斜面に武部西古墳、出西小丸古墳群（1・2号墳）、高野古墳群といった横穴式石室を持つ古墳が造られるようになり、また平野横穴墓群、大倉横穴墓群に代表されるような横穴墓群が丘陵斜面に多数出現する。

奈良時代の様子は『出雲国風土記』から窺い知ることができる。それによると、斐川町は出雲国出雲郡に属し、出雲郡の郡家は出雲郷にあったことが記されている。出雲郷は現在の斐川町大字出西地区周辺にあたり、平成4年に行われた調査で出雲郡家に伴う正倉跡と推定される後谷（V）遺跡が見つかり、より具体的に郡家の所在地が明らかになった。また、『出雲国風土記』記載の河内郷新造院との関係で注目されるものとして、仏経山を北西に仰ぐ標高200mの山頂に位置する天寺平廃寺がある。塔および金堂の基壇と礎石が確認されたことで伽藍配置が判明し、さらに奈良時代後期から平安時代初めの瓦類が多数発見された。³出雲郷には、奈良時代前期の瓦類が出土し、寺院関係の遺跡の可能性も考えられる小野遺跡や稻城遺跡があり、これらは共に出雲郡の当時の仏教文化を考える上で重要である。

中世頃の遺跡としては、仏経山から連なる山々の一つである高瀬山に、尼子氏の家臣米原氏の居城、高瀬山がある。

今回調査を行った後谷IV遺跡は斐川町大字出西地内に所在し、出雲郡家に伴う正倉跡と推定される後谷（V）遺跡の南西0.5kmの地点にある。調査区は、標高24m程度の水田で低丘陵に挟まれた南北に細長い谷「後谷」の谷間に立地し、国引き神話の「お立て山」にあたる一本松山を南西に望む。周辺の丘陵上には、西0.2kmの所に出西小丸古墳群、北西0.1kmに円墳1基、方墳3基から成る後谷丘陵古墳群や北東0.6kmの位置に帆立貝状の前方後円墳を思わせる1基を含む9基の円墳がある長者原古墳群など小規模の古墳が集中している。谷の出口付近には、後谷（V）遺跡や軒丸瓦、呪符木簡や大量の須恵器、上質土器が出土した稻城遺跡や円面鏡、墨書き器、瓦類が出土した小野遺跡といった役所あるいは寺院関係の施設が想定される遺跡がある。また周辺地域には『出雲国風土記』にも登場する曾根能夜神社（曾伎乃夜社）や久武

神社（久牟社）があり、長者原・稻城等の郡家所在地の比定に関連しそうな地名・神話伝承が多く残る。

III. 層位

基本的な層序については、概ねではあるが調査区を南北に分けて考えることとする。

まず、南側では、現代耕作土を除去すると、部分的にではあるが、層厚5cm程度の床土層が露呈し、第3層は昭和50年頃の圃場整備によると思われるローリングを受けた灰褐色の粘質土で炭、クサリレキや1~10cm大の礫をわずかに含む。第4層は後谷遺跡の調査でよく確認される地山で、露呈当初は灰色で時間が経過すると酸化して黄橙色に変化する粘質土あるいはシルト層である。この層には1cmから人頭大の礫や1cm程度のクサリレキが含まれる。

北側では、南側で確認された床土層が認められず、第2層については圃場整備によって、かなりローリングを受けた痕跡がみられるにぶい橙色混じりの褐灰色粘質土で、0.5~2cm大の礫を少量含む。第3層は、粘性の強い褐灰色の粘質土である。第3層下は部分的に、第3層よりやや色調の濃い褐灰色の粘質土を介在して、灰オーブン色粘質上の地山に至る。

遺物については地山までの各層から検出された。攪乱を受けた層には、弥生時代後期から近世までの陶磁器が含まれ、須恵器や土師質土器がごくわずかではあるが出土した。地山直上のプライマリーな状態を保った層からは、主に弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が検出された。

遺構検出は、堆積土上面で行なうことが困難を極めたため、目的の時代の遺構が深く刻まれていることに期待し、安定した状態での検出につとめて、地山面で試みた。

なお、調査区南壁断面の西側で谷地形が認められたが、奈良・平安時代の遺構確認という今回の調査目的から考えて、それ以前と判断される谷地形については、下層遺構として扱い、面的な検出および掘り下げは行なわなかつた。

IV. 遺構

遺構としては、調査区全体でピット、溝状遺構、性格不明遺構などが検出された。

また、調査区を東西に横断する杭列については、昭和50年頃の圃場整備前に存在した畦畔に伴うものと思われる。

ピットについては、小さいもので直径約8cm、深さ10cm程度のものから、大きいものになると、直径約36cm、深さが20cm程度のものまで調査区全体から40個検出されたが、いずれも小規模で建物を構成するものとして確認されなかった。直径8cm程度のものは、規模や位置から判断して、杭列に伴うものと考えられる。

溝状遺構は、全部で3条確認された。SD01は、調査区北側で検出され、ほぼ東西に向かって検出された。全長は不明であるが、幅30cm前後、深さ約8cmを測り、埋土は、粘性が強く、炭を微量含んだ灰褐色粘質土である。SD02もSD01と同様に調査区北側で検出された。幅30cm前後、深さは最深部で10cmを測る。埋土は粘性が強く、炭を微量含む褐灰色粘質土あるいは灰褐色粘質土であるが部分的にこの層の下でやや色調の薄い褐灰色粘質土が介在する。埋土中より土師器の甕と須恵器の甕が出土している。SD03は、調査区の東端で検出された。幅24~36cmで、深さは5cm程度と非常に浅い。埋土は、粘性の強い、炭を微量含む灰褐色粘質土であるが、部分的に褐灰色粘質土が露呈する。

性格不明遺構は四つ確認された。SX01は長径144cm、短径100cmの不定型で深さは約10cmである。埋土は粘性が強く、炭を微量含む灰褐色粘質土である。SX02は長径180cm以上、短径128cmの不定型で、深さは最深部で27cmを測る。埋土は、粘性が強い、炭を微量含んだ灰褐色粘質土である。SX03は、長径が84cm、短径56cmの不定型で、SX02につながるものかもしれない。SX04は、調査区の南側で検出された。長径144cm以上、短径が80cmの不定型である。いずれも時期や性格については判然としない。

V. 遺物

調査区全体から、コンテナ4箱分の弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。しかし、細かい破片がほとんどで、図化できるものはわずかであった。

1は復元口径15cmの頸部外面に突帶を貼りつけた壺である。色調は、口縁部の外面は灰黄褐色であるが、突帶部分や内面は灰白色である。胎土は粗く、1mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は普通である。第3層中層から出土した。

2・3は口縁部が「く」字状に屈曲する壺で、3の方がより胴部が張り出すと思われる。2は復元口径17.2cmで、焼成はやや不良である。色調は、外面では橙色に褐灰色がまじり、内面ではにぶい黄橙色に黄灰色がまじる。口縁端部は黒褐色である。胎土は粗く1mm以下の砂粒を多く含むが、2~2.5mm程度の大粒のものも目立つ。第3層最下層から出土した。3は復元口径24.0cmで、焼成はやや不良である。胎土は粗く0.5mm以下の砂粒を多量に含むが、1.5mm前後の砂粒も目立つ。色調は、外面はにぶい橙色であるが、くびれ部分には赤灰色が混じる。内面は灰黄色である。Pit1から出土した。

4・5・6は口縁部が朝顔状に開く壺であると思われる。

4は口縁端部を下方へ屈折しながら平坦面を作り、その平坦面には半円形状に刻まれた沈線が施されている。復元口径は13.9cmで、色調は内外面ともに淡黄色である。胎土には1mm前後の砂粒を含むが、2~3mm程度の大粒のものも目立つ。焼成はやや不良である。Pit2から出土した。5は復元口径が22.2cmで、内外面ともにナデ調整がなされ、色調は淡黄色を呈す。胎土には1~2mmの砂粒を多量に含み、焼成は普通である。第3層中層から出土した。6は口縁端部に2条の凹線文が施され、その上に円形浮文が貼り付けられている。復元口径は28.4cmを測る。胎土は1mm前後の砂粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰白色をしている。焼成は普通で、第3層中層から出土した。

7は適切さを欠くかもしれないが、復元口径21.6cmの長頸壺と思われる。外傾して伸びる長めの口頸部を有し、断面三角形突帶文が2条貼り付けてあ

る。口縁端部は外方に屈折する。色調は内外面ともに浅黄橙色で、焼成は普通である。胎土は粗く1mm前後の砂粒を多量に含む。第3層上面から、9・14・20とほぼまとめて出土した。

8は、口縁端部に平坦面を有する復元口径32.0cmの大型の鉢であると思われる。外面の一部には縦方向の刷毛目調整がなされ、内面はナデ調整である。色調は、外面は褐灰色であるが口縁部付近では灰色を呈し、内面は灰黄色で、口縁部付近はにぶい黄橙色をし一部褐灰色である。胎土は0.5mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は普通である。第3層中層から出土した。

9~17は複合口縁の甕である。

9は口縁端部がやや肥厚して丸く収められている。今回出土した複合口縁の甕の中で、唯一胴部まで復元でき、胴部外面には縦方向の刷毛目調整がなされている。口縁部は内外面とともにヨコナデがなされている。復元口径は17.8cmで焼成は普通である。色調は外面の口縁部から肩部にかけては灰色で、胴部は灰白色である。内面は灰白色で、口縁端部付近は黒色を呈す。胎土には1mm以下の砂粒を多量に含む。第3層上面から出土した。

10~13は口縁端部をわずかに外方へ引き伸ばし、丸く収めてある。

10は復元口径17.4cmで、内外面ともにヨコナデがなされている。色調は、外面の口縁部分は暗灰色で一部黄橙色をしている。外面のくびれ部分と内面は灰白色である。胎土は粗く0.5mm前後の砂粒を多量に含み、焼成は普通である。第2層下層~第3層上層から出土した。11は復元口径15.0cmで、焼成は普通である。調整は内外面ともにヨコナデであり、胎土には1~2mmの砂粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰白色である。第3層中層から出土した。12の復元口径は16.0cmを測り、内外面ともにヨコナデがなされている。焼成は普通で、胎土は粗く、1mm以下の砂粒を多く含むが2mm程度の大粒のものも点在する。色調は、口縁部外面がオリーブ黒色で、外面のくびれ部分と内面が灰白色である。第3層上層から出土した。13は復元口径16.3cmで、焼成は普通である。内外面ともにヨコナデがなされ、色調は内外面ともに灰白色だが、外面には赤褐色の部分がある。胎土には1mm前後の砂粒を多量に含む。第3層上面より出土した。

14~17は口縁端部が平らになっている。

14は復元口径15.2cmで、内外面ともにヨコナデがなされている。色調は、外面は黒褐色で一部灰白色である。内面は灰白色を呈す。胎土には0.5mm以下の砂粒を多量に含み、焼成は普通である。第2層下層から出土した。15の復元口径は14.4cmを測り、焼成は不良である。胎土は粗く、1mm前後の砂粒を多く含むが、2mm程度の大粒のものも目立つ。調整は内外面ともにヨコナデで、色調はともに灰白色を呈し、内面には明褐色が混じる。第3層上面より出土した。16は復元口径は18.0cmである。焼成は普通で、色調は内外面ともに灰白色を呈す。内外面ともに調整はヨコナデであり、胎土には、1mm前後の砂粒を多く含む。第3層中層より出土した。17の復元口径は19.2cmである。調整は内外面ともにヨコナデで、胎土はやや粗く、0.5mm前後の砂粒を多量に含むが、なかには2~3mm程度のものも目立つ。色調は内外面ともに灰白色で、焼成は普通である。第2層下層~第3層上層から出土した。

18は復元口径19.8cmの単純口縁の甕である。外面は、ナデ調整がなされている。色調は、外面がにぶい黄橙色で、内面は淡黄色を呈す。胎土は粗く、1~2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は普通である。SD02より出土した。

19は口径が9.1cmの器受部の小さい器台であると思われ、口縁端部はわずかに上方に屈折している。内外面ともにナデ調整がなされ、色調は、灰白色である。胎土には2~3mm大の砂粒を微量に含み、0.5mm以下の砂粒を少量含む。焼成は普通である。第3層から出土した。

20は体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾するが口縁部は大きく外反して開く高杯である。口径は18.2cmで、内外面ともにナデ調整がなされている。外面の色調は灰白色で、一部橙色をしている。内面は灰白色に明褐色が混じっている。胎土には1~2mmの砂粒を多量に含み、焼成は普通である。第3層上面から出土した。

21は口径11.8cm、底径3.6cm、器高5.0cmの鉢である。内外面ともに様々な方向にナデ調整が行なわれている。色調は、内外面ともに灰白色に明黄褐色が混じり、底部付近には褐灰色が広がる。胎土は粗く、1~1.5mmの砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。第3層最下層より出土した。

22・23は須恵器である。頸部が外反して立ちあがり、口縁部付近で若干肥厚する甕の口縁部であると思われる。22は復元口径16.9cmで、内外面ともに回転ナデがなされている。色調は青灰色で、胎土は密で0.5mm前後の白色砂粒を含む。焼成は普通で、第2層下層～第3層上面から出土した。23は頸部にカキ目が施されている。復元口径が21.8cmで、焼成は普通である。色調は、外面は暗青灰色で、内面は灰色を呈している。胎土は密で1mm以下の砂粒を少量含む。SD02から出土した。

24・25は土師質土器である。

24は底径5.3cmの杯で、外面底部は糸切りがなされている。色調は、外面は明黄褐色で一部淡黄色をしており、内面は淡黄色である。胎土は密で1mm以下の砂粒を微量含む。焼成は普通である。第3層下層から出土した。25は高台径6.9cmの高台付杯で、「ハ」の字状に開く高台を持つ。内外面ともにナデ調整がなされ、灰白色の色調を呈す。胎土は、密で0.5mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成はやや不良である。第3層中層から出土した。

VI. まとめ

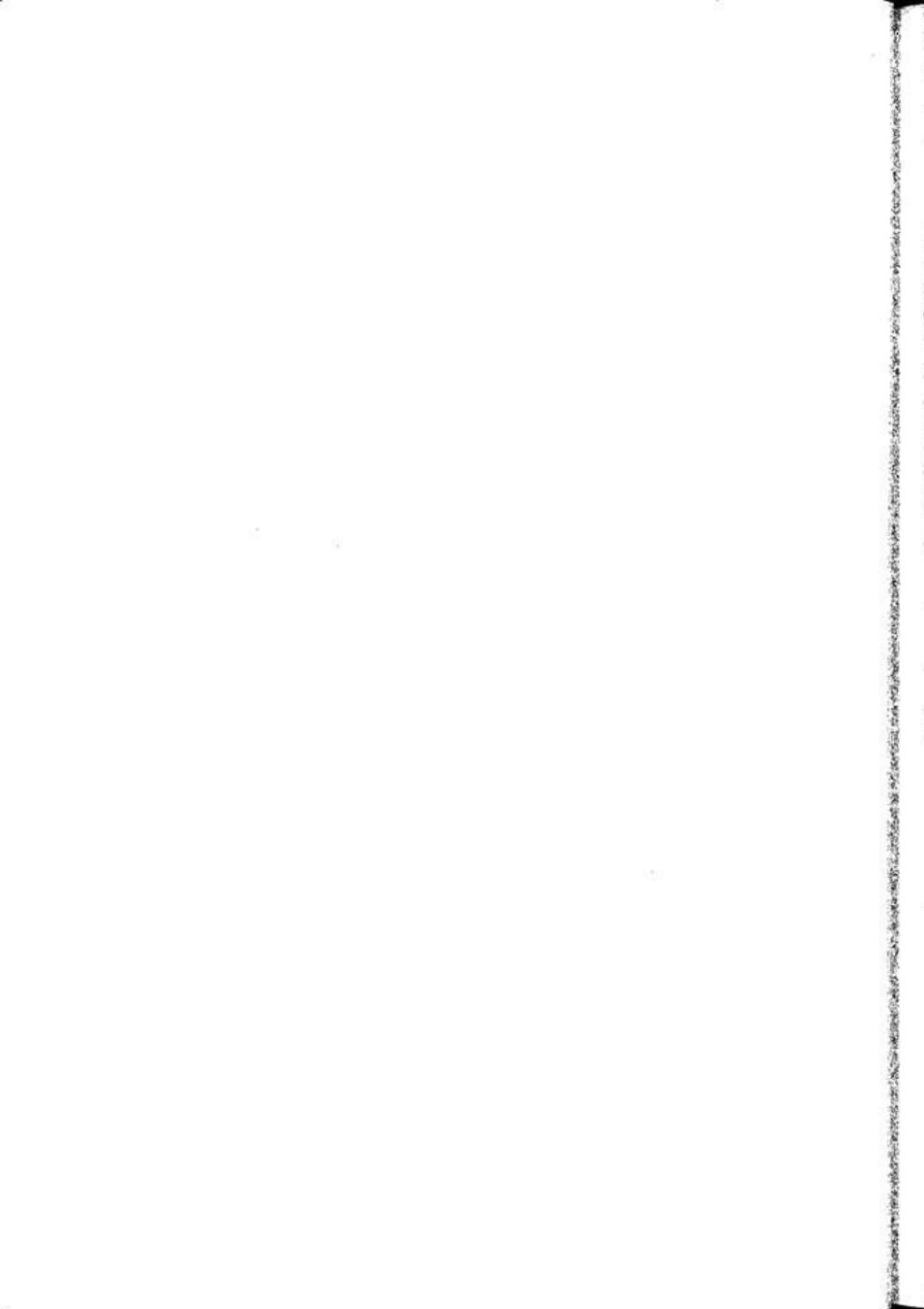
今回の調査区は、後谷（V）遺跡で確認された正倉跡と思われる位置より南西に約500mのところであったが、目的としていた郡庁跡が確認されなかつたのは非常に残念な結果である。しかし、郡庁の存在可能性箇所が一つ消えたことにより今後の調査箇所の絞り込みに非常に貢献したものと確信している。また今回の調査によって、後谷（V）遺跡及びその周辺遺跡で確認された弥生時代後期～古墳時代初頭頃の遺物が当該調査区でも検出されたことにより、同時代の痕跡の拡がりが谷の奥まで認められたことは一つの有意義な成果である。

先述のとおり、今回の調査では残念ながら郡家関連の遺構を認めることができなかったが、今後のなお一層の調査・研究によって、出雲郡家の全容解明に期待したい。

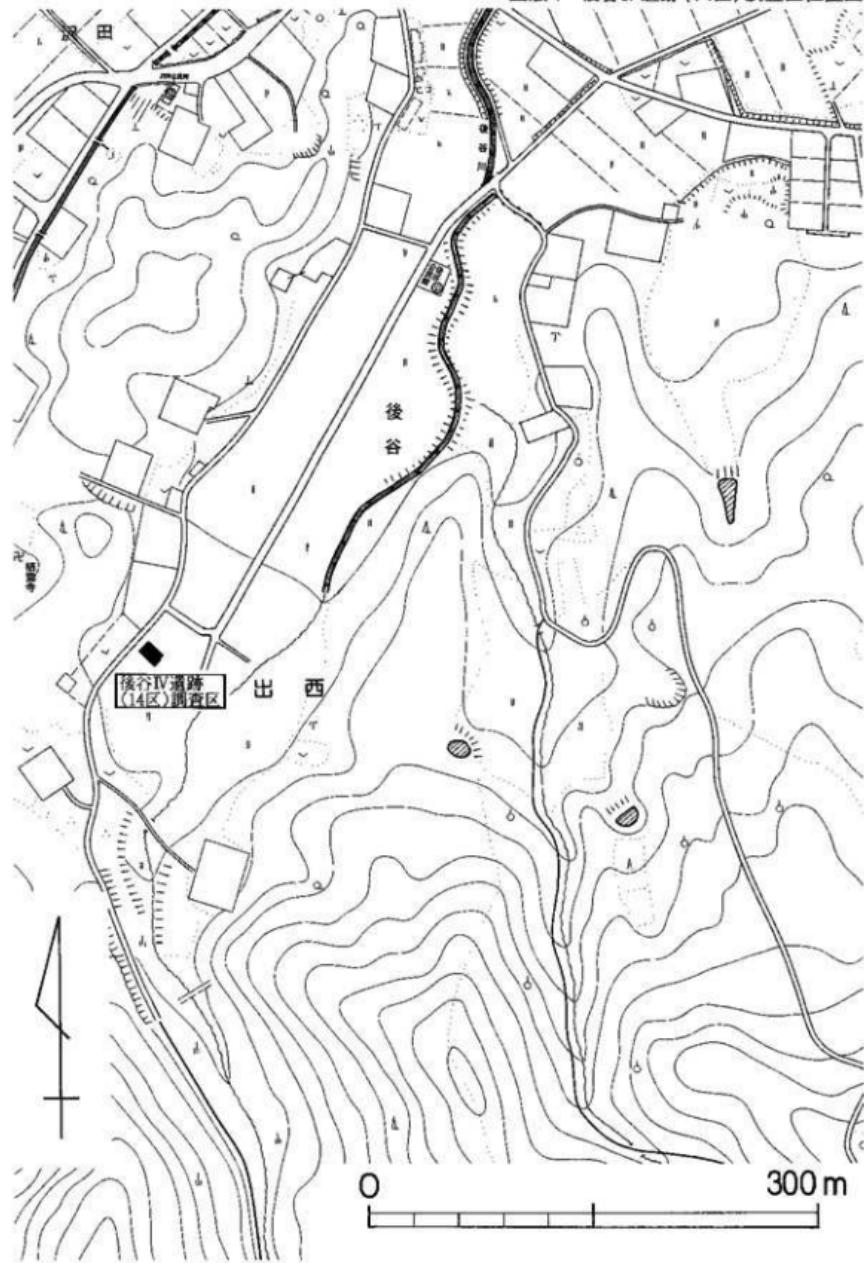
註

- ① 斐川町教育委員会「後谷V遺跡」1996
- ② 斐川町教育委員会「出雲郡家関連遺跡群第6次発掘調査概報」1998
- ③ 斐川町教育委員会「天寺平廐寺について」
『八雲立つ風土記の丘』No.84 島根県立八雲立つ風土記の丘1987
- ④ 池田敏雄「周辺の神話・地名伝承」「後谷V遺跡」1996

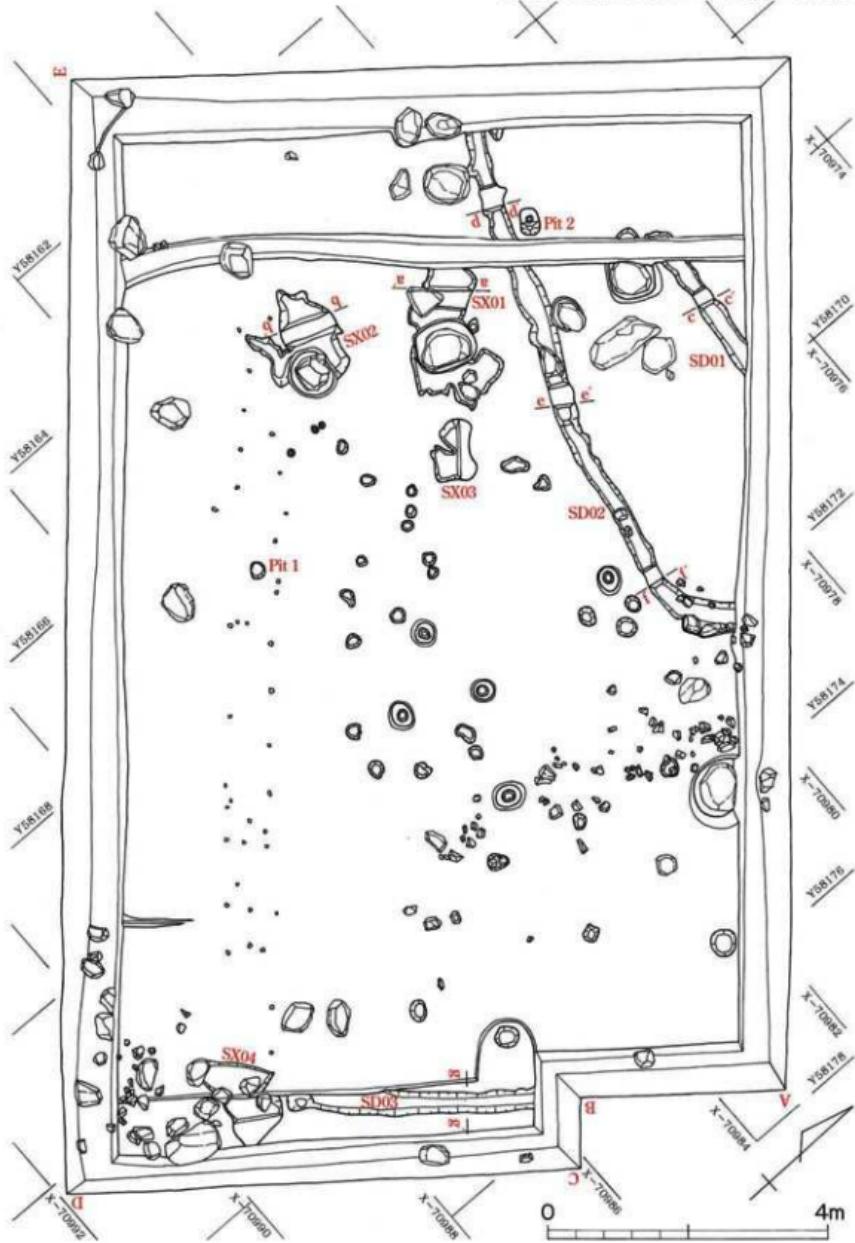
図版



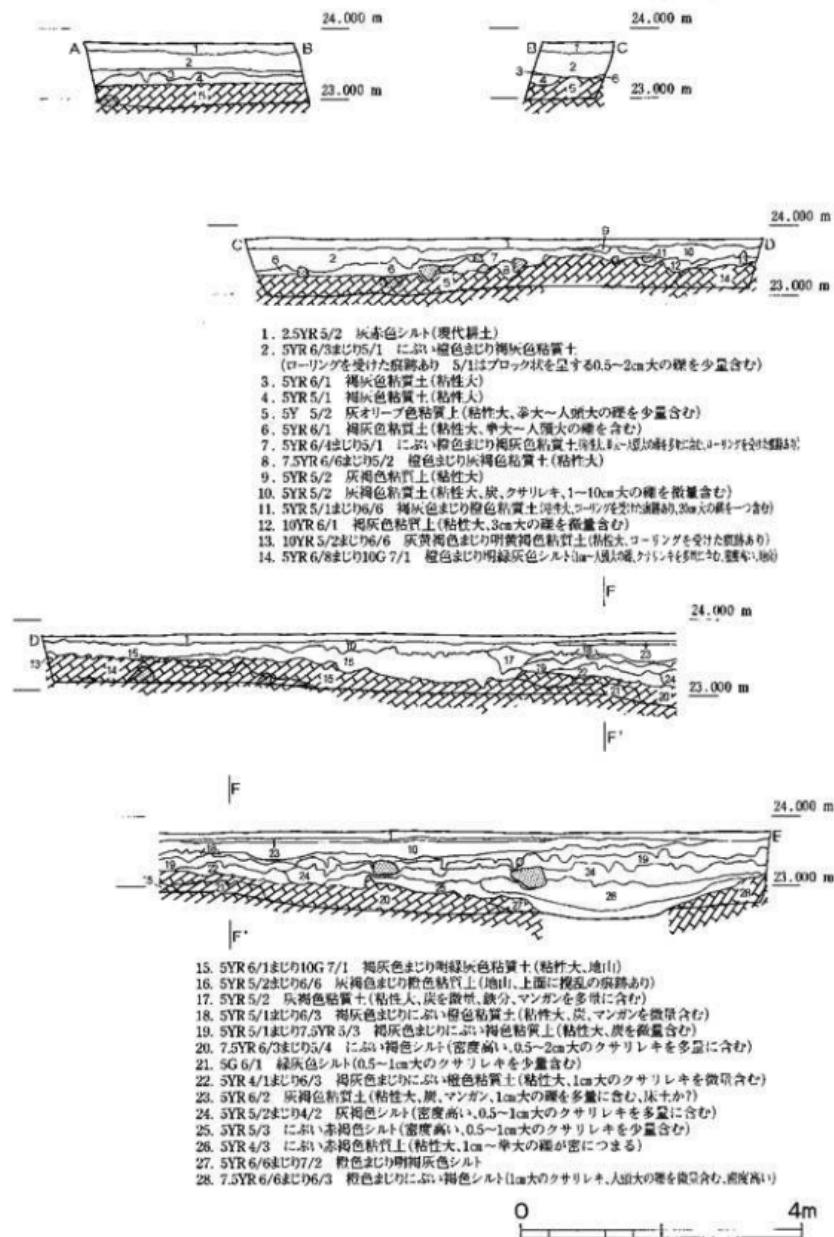
図版1 後谷IV遺跡(14区)調査区位置図



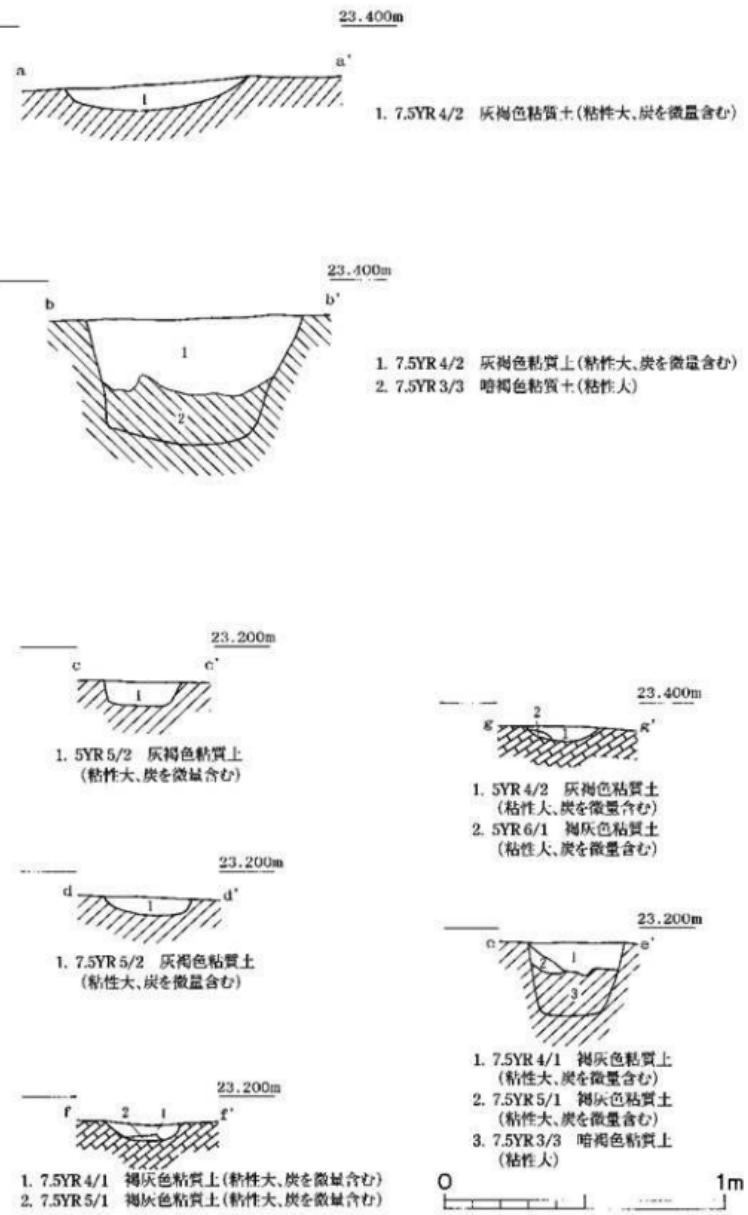
図版2 後谷N遺跡(14区)調査区平面図



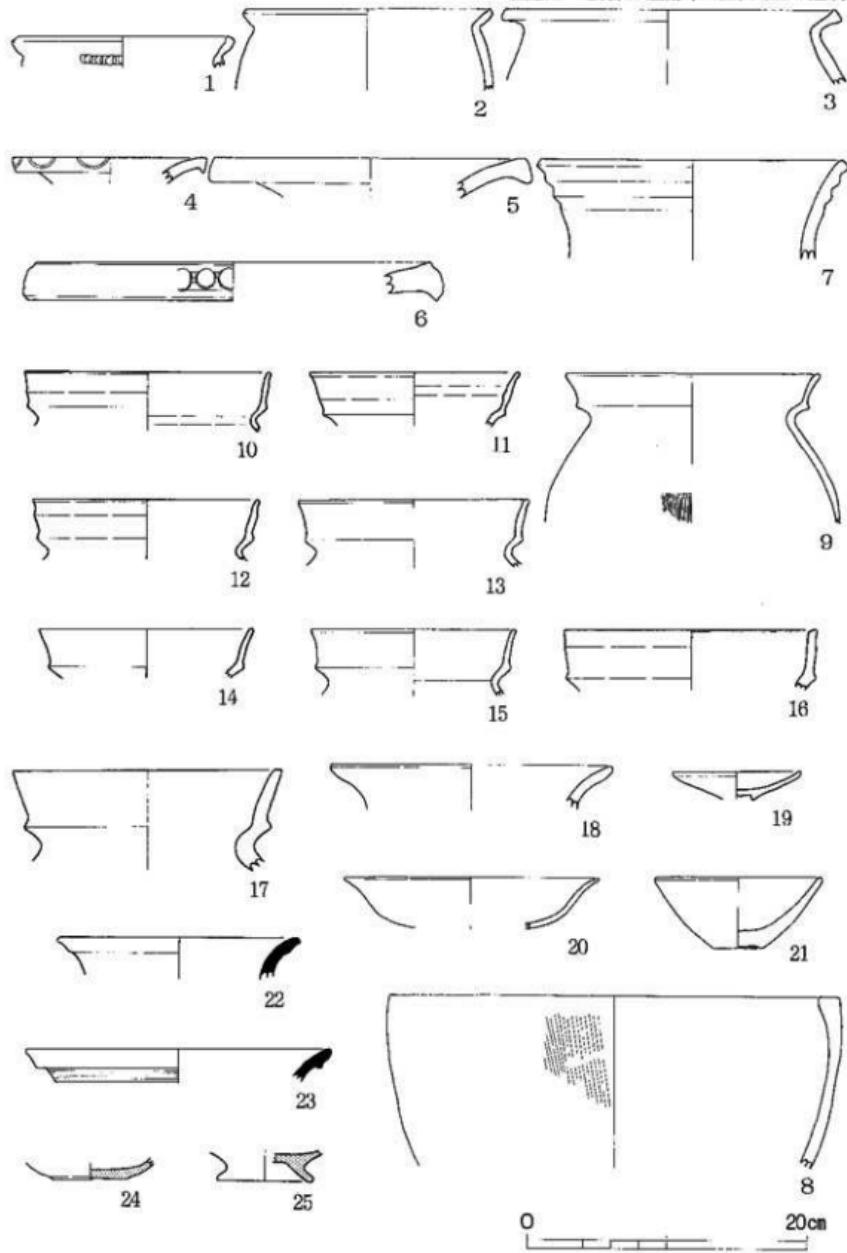
図版3 後谷IV遺跡(14区)調査区断面図



図版4 後谷M遺跡(14区)邊構断面図



図版5 後谷IV遺跡(14区)出土の遺物



図版6 後谷IV遺跡（14区）調査前現況



(北東から)



(北西から)

図版7 後谷IV遺跡（14区）調査区全景



遺構検出状況（南東から）



遺構掘削後（南東から）

図版8 後谷IV遺跡（14区）調査区断面



(東から)



(西から)

図版9 後谷N遺跡（14区）遺物出土状況

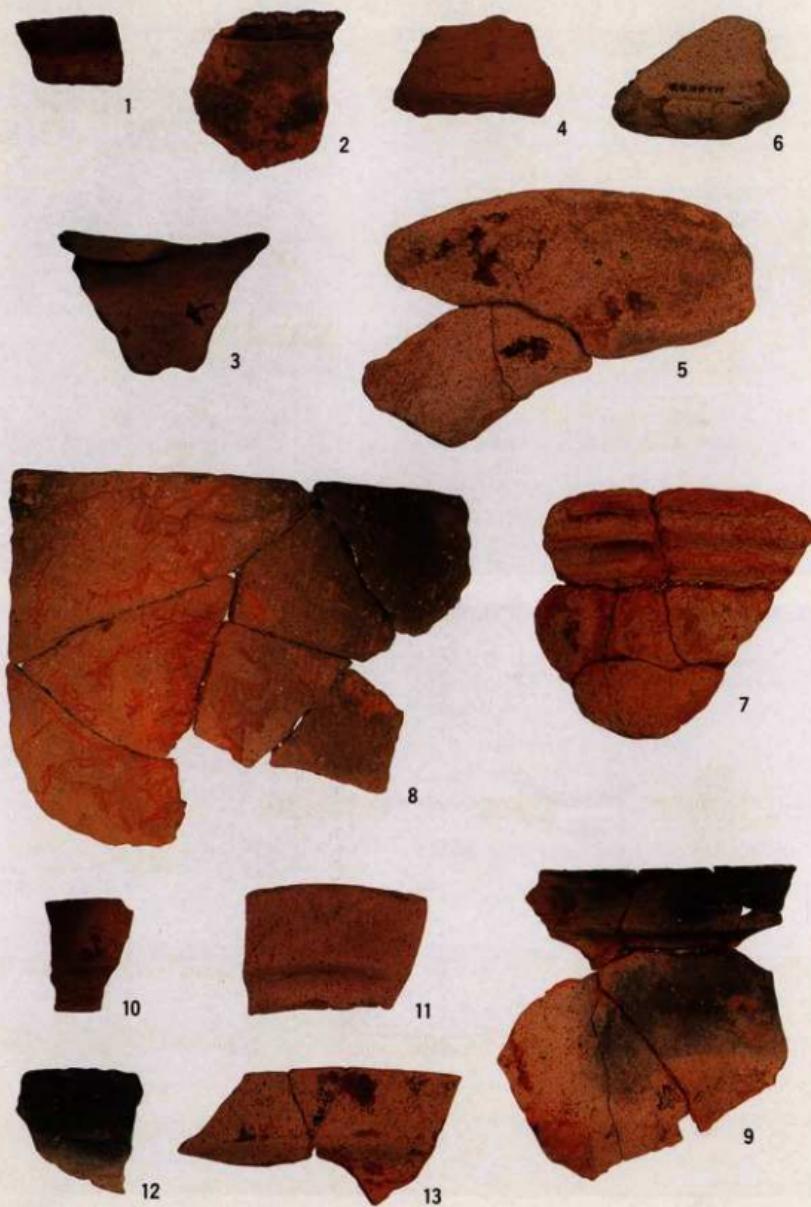


(北東から)



(西から)

図版10 後谷IV遺跡（14区）出土の遺物①



図版11 後谷IV遺跡（14区）出土の遺物②



14



15



16



17



19



18



20



22



23



24



25



21

報告書抄録

ふりがな	いざもぐうけかんれんいせきぐんだい じはくつちようさがいにう
書名	出雲郡家閨連遺跡群第9次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	斐川町文化財調査報告
シリーズ番号	第25集
編著者名	原 賢二・伊藤歩美
編集機関	斐川町教育委員会
所在地	〒699-0592 島根県簸川郡斐川町大字莊原町2172番地
発行年月日	西暦 2001年3月31日

ふりがな 所収追跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		町村	追跡番号					
うるさに いせき 後谷 IV 追跡	しまねけんひかわぐん 鳥根県簸川郡 ひかわちょうおおむねまちく 斐川町大字出西	32401	99	35度 21分 33秒	132度 48分 27秒	001113 ～ 010228	176 m ²	国庫補助事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後谷W遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	ピット 溝状遺構 谷地形など	弥生土器・十師器・須恵器・上師質土器など	

斐川町文化財調査報告第25集
出雲郡家園連遺跡群第9次発掘調査概報

発行 2001年3月
編集 斐川町教育委員会
〒699-0592
島根県斐川郡斐川町大字萩原町2172
Tel 0853(73)9190
印刷 島根印刷株式会社